干潟

曽根干潟ってどんなところ?

いまの曽根干潟の姿

曽根干潟は、小倉南区の曽根新田の海側に広がる517haの干潟です。そこに、竹馬川、大野川、貫川、朽網川が流れ込み、1年間に約7,000万㎥の淡水と、約3,300tの土砂が運ばれています。※

曽根干潟一帯は昔から漁場として利用されており、カキ養殖、刺し網、定置網などの漁業が営まれています。周辺には農地や産業用地などが広がり、干潟の沖には、海上空港である北九州空港があります。

曽根干潟にはズグロカモメやシマヘナタリ、カブトガニといった希少な生物たちが生息しており、平成13年に環境省が指定する重要湿地の一つに選定されました。

※平成8年3月「曽根漁港海域環境調査委託　報告書」より

干潟の移り変わり

大昔の曽根干潟は、海が西側に奥深く入り込んでいたようです。記録に残されている一番古い干拓は、寛永のころ(1624～1643年)、細川忠興が行ったものです。その後も江戸、明治、大正、昭和と次々と進められて、約585haの干拓が行われてきました。

昔の曽根海岸の様子

旧北九州空港のあたりは、昭和のはじめまでは湿地帯で、塩田やシチメンソウの群落が広がっていました。その後埋め立てられ、いまのような海岸線になりました。

曽根新田の海岸線には、いまの3分の2ほどの高さの石積み堤防があり、間島から堤防の前の砂浜まで、砂洲が延びていました。ところが、昭和17年の台風で堤防が決壊したため、砂洲の砂を利用して、いまの堤防に復旧したということです。

曽根干拓の変遷と干潟地形

▲カキの養殖

▲小型定置網漁

環境

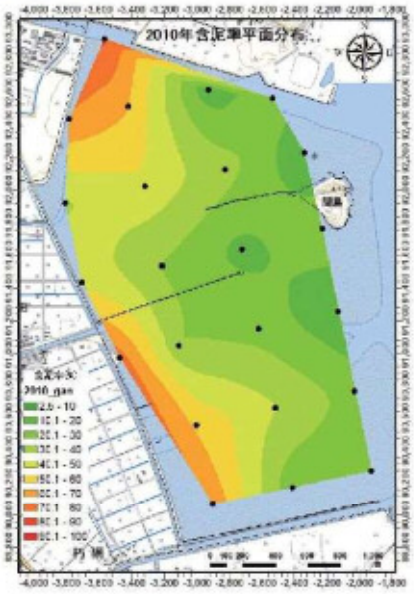
曽根干潟の底質環境

干潟の生き物は、砂や泥といった土の質（含泥率）や、引き潮の時に干上がる時間の長さを決める地盤の高さ（地盤高）などによって棲む種類が異なります。

曽根干潟は平均して泥分40%、砂分60%の砂泥干潟で、北側が南側よりも若干地盤が高く、乾燥しやすくなっています。

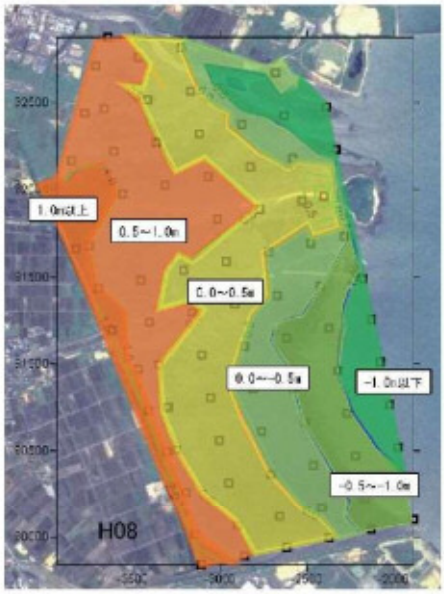
竹馬川河口の南側や貫川河口から朽網川河口の前面には、安定した泥場が広がり、カブトガニの幼生の生息地となっています。

底質〈含泥率〉



出典：平成22年度自然環境定量調査・補足充実調査報告書

地盤高〈東京湾平均海面（T.P.）〉



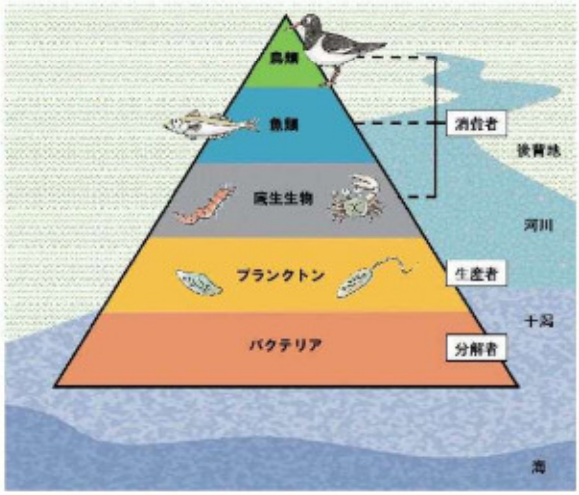
出典：平成23年度曽根干潟環境調査（地盤高等）業務委託報告書

干潟と生き物

干潟は川と海が出会う場所です。河川の流れ込みや潮の満ち引きによって、干潟には砂や泥、栄養分などがもたらされ、たくさんの生き物の生息を支える場所となっています。

また、生き物それぞれの役割（活動）のおかげで、干潟は浄化され、安定した姿を保っています。

干潟では、川から流れ込む豊富な栄養分によってプランクトンが繁殖しています。

このプランクトンを底生生物（ゴカイ類、貝類、カニ類）が、さらに、これらのプランクトンや底生生物を魚や鳥が餌として利用しています。このように干潟では生物の食う食われるという流れの中で、栄養分が生物へと姿を変え、捕獲や移動によって干潟の外に出ていくことで、干潟は常にきれいな環境を保つことができます。

また、干潟では潮の満ち引きや生き物の働きによって、常に酸素が供給されることで、バクテリアが活性化します。バクテリアは、干潟に流れ込む有機物や生物の糞や死がいなどを分解することで、干潟を浄化する働きを担っています。